

(1) 次の文章を読んで、後の問いに答えましょう。

二匹にひきの馬が、窓まどのところでごうごうと昼寝ひるねをしていました。すると、すずしい風がでてきたので、一匹いっぴきがくしゃみをして目を覚ましました。ところが、後ろ足が一本しびれていたので、 よろけてしまいました。「おやおや。」

その足に力を入れようとしても、 入りません。そこで友だちの馬をゆり起こしました。「たいへんだ、後ろ足を一本、だれかにぬすまれてしまった。」

「だって、ちゃんといっているじゃないか。」

「いやこれはちがう。だれかの足だ。」

「どうして。」

「ぼくの思うままに歩かないもの。ちょっとこの足をけとばしてくれ。」

そこで、友だちの馬は、ひづめでその足を けとばしました。「やっぱりこれはぼくのじゃない、いたくないもの。ぼくの足ならいたはずだ。よし、早く、ぬすまれた足を見つけてこよう。」

そこで、その馬はよろよろと歩いてゆきました。

「やあ、イスがある。イスがぼくの足をぬすんだのかもしれない。よし、けとばしてやろう、ぼくの足ならいたはずだ。」

馬はかた足で、イスの足をけとばしました。

イスは、いたいとも、なんとも言わないで、こわれてしまいました。

(『あし』新見南吉。出題にあたり一部を書き改めたところがある。)

問一

文章中の

に入るふさわしい言葉を、後のア～エの中から

ら選び、記号で答えましょう。

①

エ

②

ア

③

イ

ア さっぱり

イ ぼおんと

ウ くつきりと

エ よろよろと

(2) 次の文章を読んで、後の問いに答えましょう。

春の①あたたかい日のこと、渡し舟に二人の②小さな子どもをつれた女の③旅人が④のりました。

舟が出ようとすると、

「おおい、ちょっとまってくれ。」

と、土手の向こうから手をふりながら、さむらいがひとり走ってきて、舟にとびこみました。

舟は出ました。

さむらいは舟のまん中に⑤とすわっていました。⑥あたたかいので、

そのうちにいねむりははじめました。

黒いひげをはやして、強そうなさむらいが、こっくりこっくりするので、子どもたちはおかしくて、ふふふと笑いました。

お母さんは口に指をあてて、

「だまっておいで。」

といいました。さむらいが⑦はたいへんだからです。

(『飴だま』新見南吉。出題にあたり一部を書き改めたところがある。)

問二

文章中の 線①～④の言葉が、「ア 動きを表す言葉」、「イ 様子を表す言葉」、「ウ 物や事を表す言葉」のどれかを考え、ア～ウの記号で答えましょう。

①
イ

②
イ

③
ウ

④
ア

問三

文章中の ⑤、⑥には様子を表す言葉、⑦には気持ちを表す言葉が入ります。それぞれふさわしい言葉を、後のア～カの中から選び、記号で答えましょう。

⑤
カ

⑥
ア

⑦
イ

付録⑧―⑩に二つのお話の続きがあるよ。この後どうなったか、気になる人は読んでみてね。



ア ぽかぽか イ おこって ウ はりきって エ 楽しんで
オ しんしん カ どっしり

【付録⑧—3】お話の続きを読んでみよう。

『あし』の続き

馬は、テーブルのあしや、ベッドのあしを、ぽんぽんけてまわりました。けれど、どれもいたいと言わなくて、こわれてしまいました。

いくらさがしてもぬすまれた足はありません。

「ひよっとしたら、あいつがとったのかもしれない。」

と馬は思いました。

そこで、馬は友だちの馬のところへ帰ってきました。そして、すきを見て、友だちの後足をぽおんとけとばしました。

すると友だちは、

「いたいっ。」

ときげんでとび上がりました。

「そおらみる、それがぼくの足だ。君だろう、ぬすんだのは。」

「何をするんだ。」

友だちの馬は力いっぱいけり返しました。

しびれがもう治っていたので、その馬も、

「いたいっ。」

と、とび上がりました。

そして、やっとのことで、自分の足はぬすまれたのではなく、しびれていたのだと分かりました。



(おしまい)

『飴^{あめ}だま』の続き

子どもたちはだまりました。

しばらくするとひとりの子どもが、

「かあちゃん、あめ玉ちょうだい。」

と手をさし出しました。

すると、もうひとりの子どもも、

「かあちゃん、あたしにも。」

といました。



お母さんはふところから、紙のふくろをとり出しました。ところが、あめ玉はもう一つしかありませんでした。

「あたしにちょうだい。」

「あたしにちょうだい。」

二人の子どもは、両方からせがみました。あめ玉は一つしかないのです、お母さんはこまってしまいました。

「いい子たちだから待っておいで、向こうへ着いたら買ってあげるからね。」と言って聞かせても、子どもたちは、ちょうだいよお、ちょうだいよお、とただをこねました。

いねむりをしていたはずのさむらいは、ぱっちり目をあけて、子どもたちがせがむのを見ていました。

お母さんはおどろきました。いねむりをじゃまされたので、このおさむらいはおこっているのにちがいない、と思いました。

「おとなしくしておいで。」

と、お母さんは子どもたちをなだめました。

けれど子どもたちは聞きませんでした。

するとさむらいが、すらりと刀をぬいて、お母さんと子どもたちの前にやってきました。

お母さんは真っ青になって、子どもたちをかばいました。いねむりのじゃまをした子どもたちを、さむらいが切り殺すと思ったのです。

「あめ玉を出せ。」

とさむらいは言いました。

お母さんはおそろおそろあめ玉を差し出しました。

さむらいはそれを舟のへりにのせ、刀でばちんと二つにわかりました。

そして、

「そおれ。」

と二人の子どもに分けてやりました。

それから、またもとのところにかえって、こっくりこっくりねむりはじめました。

(おしまい)